

原因別にみた死産性比に関する研究

東北大学医学部公衆衛生学教室 (主任 瀬木三雄教授)

笹 島 鏡 子
ササ シマ キョウ コ

(受付 昭和 35 年 4 月 22 日)

序

死産の性比に関しては、本邦においては瀬木他¹⁾、堀内他²⁾、高橋³⁾、川原他⁴⁾、和田⁵⁾等によつて報告されているが、原因別にみた死産性比についての研究はなされていない。筆者は、昭和23年1月より6月に至る6カ月間における日本全国の死産届出に基いて、自然死産及び人工死産のそれぞれにつき、原因別に性比を算出し、その解析を試みた。

資 料

本研究の資料は、昭和23年1月より6月までの全国における死産届の控(人口動態統計調査票死産票)である。死産の届出を義務づけられているのは妊娠4カ月以後のものであり、従つて本研究における死産には妊娠3カ月以前のものは含まれない。調査対象となつた死産数は69,739例であり、うち自然死産が57,189例、人工死産中絶が12,550例である。

なお、我が国においては、昭和23年7月に優生保護法が公布されて以来、人工死産中絶が激増し、死産届出数のうち人工死産中絶数が著しく増加したが、本調査の時期は同法の公布直前であり、本調査における人工死産中絶は現状と異なつて純然たる医学的適応によるものだけと解釈してよい。

昭和23年1～6月の全国における死産の出産数1万に対する率は、自然死産率377.2、人工死産率55.7であり、昭和33年における死産率と比べると、自然死産は約4分の3であるが、人工死産は約9分の1にすぎない。

自然死産57,189例の原因別にみた例数、率、総数中の割合は第1表に示す如くで、最も多い原因は「胎児の異常」で総数の15.3%を占め、死産率は58.3(出産1万につき)であり、以下「付属物異常」14.8%(率56.3)、「妊娠中毒症」9.9%(率37.6)、「外因」9.3%(率35.5)、「母体偶発疾患」7.2%(率27.5)、「胎児異常」6.6%(率25.1)の順である。胎児の異常のうち、發育不良・早産がその約5割である。付属物異常では羊水異常及び臍帯纏絡が多く、両者合わせて6割に達する。妊娠中絶

症では妊娠腎及び腎炎が最も多くその45%を占め、次いで胎盤早期剝離が40%を占める。外因のうち過労・労働が47%、転倒・打撲が45%を占める。母体偶発疾患では脚氣が最も多く約2割を占める。

人工死産12,550例の原因別例数、率、総数中の割合は第2表に示すようである。最も多い原因は「結核」で総数の28.7%を占め、死産率は23.8(出産1万につき)であり、以下「妊娠中毒症」22.7%(率18.8)、「母体偶発疾患」20.8%(率17.2)、「付属物異常」6.5%(率5.4)、「胎児異常」4.7%(率3.9)、「性器及び産道異常」3.7%(率3.1)、「胎位異常」1.9%(率1.6)等の順である。妊娠中毒症のうちでは妊娠腎及び腎炎が半数以上を占めて最も多い。母体偶発疾患では心臓疾患、脚氣が多い。付属物異常では前置胎盤が最も多くその4割強を占める。胎児異常のうちでは胎児奇形が約4分の1を占めている。

自然死産、人工死産それぞれの妊娠月数別例数及び割合は第3表に示すようである。自然死産は妊娠10カ月以上が約4割を占めて最も多く、妊娠月数の少ないほど概ね死産数が少なく、4カ月のものは3%にすぎない。人工死産5はカ月のものが最も多く、10カ月がこれに次ぎ、両者合計で約半数を占め、9カ月が5%にすぎず最も少なく、10カ月以上は約1割を占めている。

同様のことを出産順位別にみれば、第4表に示すように、自然死産も人工死産も第1回のものが最も多く、それぞれの総数の36%、34%を占め、出産順位の低位のものほど少なくなる。

又、母の年齢別にみた死産数は第5表に示すようで、自然死産も人工死産も20才台に最も多く、総数の約半数を占め、30才台がこれに次ぎ、20才未満及び45才以上は極めて少ない。

死産性比の解析方法

自然死産及び人工死産のそれぞれにつき、主なる原因別に、妊娠月数別に性比を算出した。

性比はまず性別不詳を除いて、男死産数と女死産数と

第 1 表 詳細原因別の自然死産数及び率

第 1 表続き

		昭和23年1月～6月			原 因	死産数	死産率 (出産1 万対)	総数に対 する割合 (%)
原 因	死産数	死産率 (出産1 万対)	総数に対 する割合 (%)					
総 数	57,189	377.2	100.0	胎位異常	3,775	24.9	6.6	
妊娠中毒症	5,643	37.2	9.9	骨盤位	2,233	14.7	3.9	
子癇	438	2.9	0.8	横位	542	3.6	0.9	
胎盤早期剝離	2,248	14.8	3.9	顔面位, 前頭位	313	2.1	0.5	
妊娠腎及び腎炎	2,535	16.7	4.4	その他の胎勢, 旋回, 胎位異常及び四肢脱出	687	4.5	1.2	
妊娠高血圧及び妊娠浮腫	140	0.9	0.2	微弱痛及びその他の陣痛異常	1,135	7.5	2.0	
その他及び不詳	282	1.9	0.5	破水異常	2,391	15.8	4.2	
梅毒	1,448	9.6	2.5	外因	5,336	35.1	9.3	
結核	814	5.4	1.4	旅行, 乗車	404	2.7	0.7	
母体偶発疾患	4,124	27.2	7.2	過労, 労働, 疲労	2,516	16.5	4.4	
心臓疾患	596	3.9	1.0	転倒, 打撲	2,416	15.9	4.2	
脚気	761	5.0	1.3	諸種流産	400	2.6	0.7	
虫垂炎	138	0.9	0.2	習慣性流早産	282	1.9	0.5	
消化器疾患	632	4.2	1.1	流産, 切迫流産, 不全 流産等	118	0.8	0.2	
呼吸器疾患	617	4.1	1.1	その他の原因	993	6.5	1.7	
外科的疾患	153	1.0	0.3	原因不詳	9,141	60.3	16.0	
その他	1,227	8.1	2.1	原因の記載なきもの	1,479	9.8	2.6	
性器及び産道異常	1,652	10.9	2.9					
性器の新生物	67	0.4	0.1	の比を百分率で求めた。即ち女を100とするときの男の				
性器, 奇形及びその他の 性器異常, 疾患	600	3.9	1.0	指数である。次に男と女の死産数の差の有意性を検定す				
狭骨盤及びその他の産 道異常	836	5.5	1.5	るために, 次の方法を用いた。「男女それぞれ50%ず				
高年初産	80	0.5	0.1	つ」を母出現率とし, 性別の判明した死産総数のうちの				
子宮破裂	69	0.4	0.1	男の占める割合が母出現率よりも多いか少ないかを, 野				
胎児奇形	1,647	10.9	2.9	家・嶋井 ⁶⁾ のカイ自乗紙によつて検定した。				
無脳体及び半脳体	370	2.4	0.6	出生数においては男の方が女よりも多いことが認めら				
水頭体	629	4.1	1.1	れており, 死産の場合もすべての原因を通じて男の方が				
その他及び不詳	648	4.3	1.1	女よりも多く, 性比は出生性比よりも概ね大きい故, 死				
胎児異常	8,763	57.8	15.3	産の性比が出生性比よりも有意に大きいか(即ち, 死産				
児發育不良, 未熟児, 生活力薄弱等	4,763	31.4	8.3	における男の多い程度が出生における男の多い程度より				
過熟児	467	3.1	0.8	も著明であるか)どうかを知る目的で, 出生性比との差の				
多胎	189	1.2	0.3	検定を次のようにして行なつた。昭和22年より25年に至				
原因不明の子宮内死亡	1,653	10.9	2.9	る4年間における日本全国の出生数のうち男の占める割				
浸軟児	1,393	9.2	2.4	合51.36%(出生数: 男5,338,669, 女5,055,892, 性				
窒息	226	1.5	0.4	比155.6——以下出生性比とはこの値を示すものであ				
頭蓋内出血	72	0.5	0.1	る)を母出現率とし, 性別判明した死産総数のうちの男				
附屬物異常	8,448	55.7	14.8	の占める割合と母出現率との差を同様の方法で検定し				
前置胎盤及び胎盤異常	1,117	7.4	2.0	た。				
羊水異常	2,657	17.5	4.6	死産の場合には性別不詳の数が相当あり, 上記の如く				
臍帯纏絡, 結節, 捻転	2,653	17.5	4.6	性別の判明したものについての観察だけでは誤りを招く				
臍帯脱出, 圧迫その他 臍帯異常	2,021	13.3	3.5	おそれがある。即ち, 性別不詳の真の内容が, 判明せる				

いとすれば、上記の判断法では不十分である。従つて、性別の判明しているものについて男女何れかが多いと結論づける場合には、数の少ない性の方に不詳の数を加えてなおかつ少ないかを検討する必要がある。実際には、殆んどすべての場合に男の方が多し故、女の数に不詳の数を加えて、男の数と比較する方法をとり、女の方が多

第 2 表 詳細原因別の人工死産数及び率

昭和23年1月～6月			
原 因	死産数	死産率 (出産1 万対)	総数に対 する割合 (%)
総 数	12,550	82.8	100.0
妊娠中毒症	2,847	18.8	22.7
子癇	356	2.4	2.8
胎盤早期剝離	271	1.8	2.2
妊娠腎及び腎炎	1,850	12.2	14.7
妊娠高血圧及び妊娠浮腫	44	0.3	0.4
悪阻	252	1.7	2.0
その他及び不詳	74	0.5	0.6
精神病	64	0.4	0.5
精神分裂病	23	0.2	0.2
その他	41	0.3	0.3
結核	3,603	23.8	28.7
母体偶発疾患	2,611	17.2	20.8
心臓疾患	1,017	6.7	8.1
脚気	779	5.1	6.2
バセドウ氏病	18	0.1	0.1
虫垂炎	41	0.3	0.3
消化器疾患	136	0.9	1.1
呼吸器疾患	117	0.8	0.9
外科的疾患	85	0.6	0.7
その他	418	2.8	3.3
性器及び産道の異常	463	3.1	3.7
性器の新生物	54	0.4	0.4
性器奇形及びその他の疾患	123	0.8	1.0
狭骨盤及びその他の産道異常	286	1.9	2.3
胎児異常(胎児奇形を含む)	595	3.9	4.7
胎児奇形	145	1.0	1.2
浸軟児及び子宮内胎児死亡	450	3.0	3.6
附属物異常	818	5.4	6.5
前置胎盤	364	2.4	2.9
羊水異常	247	1.6	2.0
臍帯異常	207	1.4	1.6
胎位異常	240	1.6	1.9
その他の原因	1,309	8.6	10.4

第 3 表 妊娠月数別、自然死産及び人工死産数

妊 娠 月 数	自 然 死 産		人 工 死 産	
	数	総数に対 する割合 (%)	数	総数に対 する割合 (%)
総 数	57,189	100.0	12,550	100.0
4 月	1,720	3.0	1,518	12.1
5 月	4,569	8.0	3,011	24.0
6 月	5,846	10.2	3,002	23.9
7 月	7,122	12.5	1,831	14.6
8 月	7,782	13.6	1,147	9.1
9 月	7,647	13.4	626	5.0
10月以上	22,311	39.0	1,385	11.0
不 詳	192	0.3	30	0.2

第 4 表 出産順位別、自然死産及び人工死産数

出 産 順 位	自 然 死 産		人 工 死 産	
	数	総数に対 する割合 (%)	数	総数に対 する割合 (%)
総 数	57,189	100.0	12,550	100.0
1 回 目	20,853	36.5	4,222	33.6
2 "	8,937	15.6	1,688	13.5
3 "	6,423	11.2	1,348	10.7
4 "	5,050	8.8	1,225	9.8
5 "	4,267	7.5	1,102	8.8
6 "	3,612	6.3	953	7.6
7 "	2,728	4.8	739	5.9
8 "	2,071	3.6	513	4.1
9 "	1,405	2.5	341	2.7
10 "	790	1.3	193	1.5
11 " 以上	734	1.3	184	1.5
不 詳	319	0.6	42	0.3

第 5 表 母の年齢別、自然死産及び人工死産数

母 の 年 令	自 然 死 産		人 工 死 産	
	数	総数に対 する割合 (%)	数	総数に対 する割合 (%)
総 数	57,189	100.0	12,550	100.0
20 才 未 満	2,194	3.8	585	4.7
20 ～ 24 才	14,608	25.5	2,859	22.8
25 ～ 29 才	14,562	25.5	2,945	23.5
30 ～ 34 才	11,140	19.5	2,535	20.2
35 ～ 39 才	9,340	16.3	2,218	17.7
40 ～ 44 才	4,453	7.8	1,198	9.5
45 才 以上	602	1.1	149	1.2
年 令 不 詳	290	0.5	61	0.5

い場合には逆の方法を用いて検討することを省略した（実際には、女の方が多い場合にはすべて有意差が認められない故、この方法で吟味する必要はなかつた）。この方法による性比は男/(女+不詳)×100であり、性別不詳を仮りに女とみなしたときの性比である。この方法による性比も100以上を示す場合（性別不詳をすべて女と仮定しても男の方が多い場合）には、男女の有意差及び出生性比との有意差の検定を前記と同様に野家・鴨井のカイ自乗紙によつて行なつた。

死産性比は殆んどすべての場合に100以上で（男の方が多く）、且つ出生性比よりも大きい。性別不詳の数がかなりあるので、このように性別不詳の数を女の数に加えて男の数と比較する方法をとつて吟味すれば、男の方が多く又は性比が出生性比よりも大きいという結論には安定性がある。

しかし、実際には妊娠月数の少ないものでは性別不詳の占める割合が著しく多く、性別の判明しているものでは男の方が遙かに多くとも、性別不詳を女に加えると男の方が却つて少なくなり、男の方が多いという断定的な結論を得られない場合が多い。

結 果

1. 自然死産の原因別性比

1) 自然死産総数

自然死産総数57,189のうち男30,810、女24,758、性別不詳1,621であり、性比は124.4で男の方が女よりも2割強多い。男女の差は有意であり、又この性比は昭和22~25年の出生性比105.6よりも有意に大きい。性別不詳を女とみなした場合においても性比は116.8であり、男の方が有意に多く、出生性比よりも有意に大きい。

妊娠月数別の性別死産数及び性比は第6表に示す如くであり、性別不詳を考慮に入れなければ、何れの月数の死産も男の方が多く、性比は妊娠4ヵ月において243.9

で最も大きく、5ヵ月の157.1がこれに次ぎ、6ヵ月以上では急に小さくなり、8ヵ月の117.0が最も小さく、10ヵ月以上では123.4と若干大きくなる。男女の死産数の差は、何れの妊娠月数のものでも有意であり、又性比は出生性比よりも大きくその差は有意である。

性別不詳を女とみなした場合には、妊娠4ヵ月では男の方が少ないが、5ヵ月以上では何れの月数でも男の方が多く、その差は有意であり、その性比は何れも出生性比より有意に大きい。即ち、妊娠4ヵ月の死産を除くと、性別不詳がすべて女であると仮定してもなお男の方が多く、又男の多い程度は出生における男の多い程度よりも大きいことが知られる。

妊娠月数別の性比は、4、5ヵ月における死産で著しく大きい。妊娠早期における死産ではこの数字の示す如く男の方が遙かに多いのかどうかはなお明言し得ない。何故ならば、性別不詳の数が4ヵ月では35%、5ヵ月では11%を占めて著しく多く、性別の判明しているものの性比だけでは正確な判断はできない。

次に妊娠回数別の性別死産数及び性比を第7表に示す。何れの回数においても男の方が多く性比は100以上である。男女の差は何れも有意であり、又何れの性比も出生性比より有意に大きい。性別不詳を女とみなした場合も何れの回数のもも男の方が有意に多く、この場合の性比(男/(女+不詳)×100)は出生性比より有意に大きい。

妊娠回数別の性比は、1回目が128.7で最も大きく、5回目126.3がこれに次ぎ、2回目の119.7が最も小さく、性比の大きさは妊娠回数によつて著しい差が認められず、又妊娠回数と性比の大きさとの間には一定の傾向は認められなかつた。

2) 妊娠中毒症による自然死産

妊娠中毒症による自然死産総数は5,643で、そのうち男2,929、女2,604、性別不詳110であり、性比は112.5で

第6表 妊娠月数別、性別自然死産数及び性比——合計

妊 娠 月 数	死 産 数				男/女			男/(女+不詳)		
	計	男	女	性 別 不 詳	%	男・女 の有意 差	出生性比 との有意 差	%	男・(女+ 不詳)の 有意差	出生性比 との有意 差
総 数	57,189	30,810	24,758	1,621	124.4	**	**	116.8	**	**
4 月	1,720	795	326	599	243.9	**	**	86.0	—	—
5 月	4,569	2,480	1,579	510	157.1	**	**	118.7	**	**
6 月	5,846	3,076	2,578	192	119.3	**	**	111.0	**	**
7 月	7,122	3,793	3,234	95	122.9	**	**	113.9	**	**
8 月	7,782	4,157	3,554	71	117.0	**	**	114.7	**	**
9 月	7,647	4,133	3,466	48	119.2	**	**	117.6	**	**
10月以上	22,311	12,273	9,946	92	123.4	**	**	122.3	**	**
不 詳	192	103	75	14	—	—	—	—	—	—

** 危険率1%で有意

* 危険率5%で有意

男の方が約1割多い。男女の差は有意であり、この性比は出生性比よりも有意に大きい。性別不詳を女とみなしてもなお男の方が有意に多いが、この場合における性比は出生性比との間に有意差は認められない。従つて、性別不詳の数を考慮に入れて厳密に観察すると、男は女よりも有意に多いと言ひ得るが、男の多い程度が出生におけるそれよりも有意に著明であると言ひ難い。

妊娠月数別には、第8表に示すように、死産月数は10ヵ月以上が約3分の1を占めて最も多く、4ヵ月は2.7%、5ヵ月は7.6%を占めるにすぎず、6~9ヵ月では月数によつて大差がない。男女を比べると、妊娠7ヵ月を除いては男の方が多く、性比は4ヵ月が最も大きく、5ヵ月がこれに次ぐ。4ヵ月より7ヵ月までは妊娠月数の多い程性比が小さいが、8ヵ月以上では一定の傾向がみられない。7ヵ月のみは女の方が多く、男女死産数の差は、4、5、9ヵ月及び10ヵ月以上において有意であ

り、性比は7、8ヵ月では出生性比より小さく、その他の月数のものは何れも出生性比より大きいが、有意差の認められるのは4ヵ月及び5ヵ月だけである。

性別不詳を女とみなした場合にもなお男の方が多いのは5、6、9ヵ月及び10ヵ月以上のもので、有意差の認められるのは後2者のみである。又上記4群では、この場合の性比が出生性比よりもなお大きい、何れも有意差は認められない。

即ち、性別不詳の数を女と仮定してもなおかつ男の方が有意に多いと認められるのは、妊娠9ヵ月及び10ヵ月以上のみであり、この性比も出生性比と比べれば有意に大きいとは言ひ得ない。又、妊娠7ヵ月までは月数の多いほど性比が小さいという傾向がある。

3) 梅毒による自然死産

梅毒による自然死産総数は1,448で、そのうち男741, 女670, 性別不詳37であり、性比は110.6で、他の原因

第7表 妊娠回数別、性別自然死産数及び性比——合計

妊娠回数	死産数				男/女			男/(女+不詳)		
	計	男	女	性別不詳	%	男・女の有意差	出生性比との有意差	%	男・(女+不詳)の有意差	出生性比との有意差
総数	57,189	30,810	24,758	1,621	124.4	**	**	116.8	**	**
1回目	20,853	11,461	8,908	484	128.7	**	**	122.0	**	**
2 "	8,937	4,734	3,955	248	119.7	**	**	112.6	**	**
3 "	6,423	3,416	2,791	216	122.4	**	**	113.6	**	**
4 "	5,050	2,718	2,164	168	125.6	**	**	116.5	**	**
5 "	4,267	2,300	1,821	146	126.3	**	**	116.9	**	**
6 " 以上	11,340	6,015	4,975	350	120.9	**	**	113.0	**	**
不詳	319	166	144	9	—	—	—	—	—	—

** 危険率1%で有意

第8表 妊娠月数別、性別自然死産数及び性比——妊娠中毒症

妊娠月数	死産数				男/女			男/(女+不詳)		
	計	男	女	性別不詳	%	男・女の有意差	出生性比との有意差	%	男・(女+不詳)の有意差	出生性比との有意差
総数	5,643	2,929	2,604	110	112.5	**	*	107.9	**	(-)
4月	150	75	41	34	182.9	**	**	100.0	(-)	(-)
5月	430	229	170	31	134.7	**	*	113.9	(-)	(-)
6月	628	323	293	12	110.2	(-)	(-)	105.9	(-)	(-)
7月	819	398	411	10	96.8	(-)	(-)	—	—	—
8月	923	459	457	7	100.4	(-)	(-)	98.9	—	—
9月	870	469	396	5	118.4	*	(-)	117.0	*	(-)
10月以上	1,808	965	833	10	115.8	**	(-)	114.5	**	(-)
不詳	15	11	3	1	—	—	—	—	—	—

** 危険率1%で有意

* 危険率5%で有意

による自然死産に比べて著しく小さい。男女の差には有意性が認められず、従つて出生性比との差も有意でない。性別不詳を女とみなせば、性比は100以上であるが出生性比よりも小さい。

妊娠月数別には、第9表に示す如く、死産数は10ヵ月以上が最も多いが総数中の割合は23.6%で余り多くなく、8ヵ月以上では月数による差が小さい。性比は6ヵ月及び7ヵ月では100未満で(女の方が多く)、4ヵ月では死産数が極めて少ないが性比は500で最も大きく、5ヵ月の性比がこれに次ぐ。4ヵ月より7ヵ月までは妊娠月数の多い程性比が小さくなるが、8ヵ月以上では再び大きくなる。男女死産数の差は4ヵ月においてのみ有意である。死産性比は6、7ヵ月を除いて、出生性比より大きい。有意差の認められるのは4ヵ月のみである。

性別不詳を女とみなしてもなお男の方が多いのは妊娠4、8、9ヵ月及び10ヵ月以上の4群であるが、有意差の認められるものはない。

即ち、妊娠月数別にみた場合、4ヵ月では男の方が女より有意に多く、その性比は出生性比よりも有意に大きい。しかし性別不詳を女とみなして計算すると、男の方が有意に多いとは言えない。又、妊娠7ヵ月までは月数の多いほど性比が小さいという傾向が認められる。

末期のものは少ない。性比は4ヵ月が253.8で最も大きく、9ヵ月までは妊娠月数の多いほど小さく、8ヵ月及び9ヵ月では100未満で女の方が多く、10ヵ月以上では151.9と大きくなる。男女死産数の差は4ヵ月及び5ヵ月において有意であり、その他の月数のものでは何れも有意差が認められない。又妊娠4、5、6ヵ月及び10ヵ月以上における性比が出生性比よりも大きい。有意差の認められるのは4、5ヵ月のものだけである。

性別不詳を女とみなせば、なお男の方が多いのは妊娠5、6ヵ月及び10ヵ月以上の3群だけであり、男女の有意差、出生性比との有意差は何れの月数においても認められない。

即ち、結核による自然死産では、総数については男が女よりも有意に多く、男の多い程度は出生におけるそれよりも著明であると言ひ得るが、妊娠月数別には4ヵ月及び5ヵ月においてのみ同様のことが認められ、その他の月数のものは有意性が認められない。性別不詳を女とみなした場合には、総数においても妊娠月数別にみても、男が有意に多いということは認められない。又、性比は妊娠9ヵ月までは月数の多いほど小さいという傾向が認められる。

5) 母体偶発疾患による自然死産

母体偶発疾患とは、結核及び梅毒を除く妊産非特有疾

第9表 妊娠月数別、性別自然死産数及び性比——梅毒

妊娠月数	死産数				男/女			男/(女+不詳)		
	計	男	女	性別不詳	%	男・女の有意差	出生性比との有意差	%	男・(女+不詳)の有意差	出生性比との有意差
総数	1,448	741	670	37	110.6	(-)	(-)	104.8	(-)	(-)
4月	25	15	3	7	500.0	* *	* *	150.0	(-)	(-)
5月	83	41	29	13	141.4	(-)	(-)	97.6	—	—
6月	155	72	76	7	94.7	(-)	(-)	—	—	—
7月	230	105	120	5	87.5	(-)	(-)	—	—	—
8月	334	174	156	4	111.5	(-)	(-)	108.8	(-)	(-)
9月	276	151	124	1	121.8	(-)	(-)	120.8	(-)	(-)
10月以上	342	182	160	—	113.8	(-)	(-)	113.7	(-)	(-)
不詳	3	1	2	—	—	—	—	—	—	—

** 危険率1%で有意

* 危険率5%で有意

4) 結核による自然死産

結核による自然死産総数は814で、そのうち男415、女339、性別不詳60であり、性比は122.4である。男女の差は有意であり、性比は出生性比より有意に大きい。性別不詳を女とみなした場合には、男の方がなお多いが有意差は認められず、この場合の性比は出生性比よりも小さい。

妊娠月数別には、第10表に示すように、死産数は6ヵ月のものが最も多く、4~6ヵ月が65%を占め、妊娠

患である。本疾患による自然死産総数は4,124で、うち男2,219、女1,766、性別不詳139であり、性比は125.7である。男女の差は有意であり、この性比は出生性比よりも有意に大きい。性別不詳を女とみなしてもなお男の方が有意に多く、この場合の性比も出生性比より有意に大きい。

妊娠月数別には、第11表に示すように、死産数は妊娠10ヵ月以上のものが最も多く全体の2割を占めるが、最も少ない4ヵ月においても約5%を占め、妊娠月数によ

第 10 表 妊娠月数別、性別自然死産数及び性比——結核

妊 娠 月 数	死 産 数				男/女			男/(女+不詳)		
	計	男	女	性 別 不 詳	%	男・女 の有意 差	出生性比 との有意 差	%	男・(女+ 不詳)の 有意差	出生性比 との有意 差
総 数	814	415	339	60	122.4	* *	*	104.0	(-)	(-)
4 月	79	33	13	33	253.8	* *	* *	71.7	—	—
5 月	162	92	52	18	176.9	* *	* *	131.4	(-)	(-)
6 月	212	109	100	3	109.0	(-)	(-)	105.8	(-)	(-)
7 月	153	76	75	2	101.3	(-)	(-)	98.7	—	—
8 月	100	48	51	1	94.1	(-)	(-)	—	—	—
9 月	33	14	19	—	73.7	(-)	(-)	—	—	—
10月以上	71	41	27	3	151.9	(-)	(-)	136.7	(-)	(-)
不 詳	4	2	2	—	—	—	—	—	—	—

** 危険率1%で有意

* 危険率5%で有意

る死産数の差が比較的少ない。性比は何れの月数においても100以上で男の方が多く、特に4ヵ月及び5ヵ月において性比が大きく、6ヵ月が最小であり、7、8、9ヵ月の3者の間には大差なく、10ヵ月以上ではやや小さい。男女の差は6ヵ月を除いては何れも有意である。又、性比は6ヵ月以外の月数のものでは出生性比よりも大きく、10ヵ月以上を除けば有意差が認められる。

性別不詳を女とみなした場合には、妊娠4ヵ月及び6ヵ月のものでは男の方が少ないが、その他の月数のものではなお男の方が多く、その差は何れも有意である。又、この場合の性比は4、6ヵ月以外の月数では出生性比よりも大きい、有意差の認められるのは5、7、9ヵ月の群のみである。

即ち、母体偶発疾患による自然死産では、総数については、性別不詳を女とみなしてもなお男の方が有意に多く、又男の多い程度は出生におけるそれよりも有意に大

きい。妊娠月数別にみると、男女の差は概ね有意であり、性比と出生性比との差も概ね有意であるが、性別不詳を女とみなした場合には、必ずしもすべての月数においてそのように言い得るとは限らない。又性比の大きさと妊娠月数との間には一定の傾向は認められない。

6) 性器及び産道異常による自然死産

この原因による自然死産総数は1,652で、うち男928、女670、性別不詳54で、性比は138.5である。男女の差は有意であり、性比は出生性比よりも有意に大きい。この性比は原因別の自然死産性比のうちでも特に大きい。性別不詳を女とみなしても、なお男の方が有意に多く、この場合の性比も出生性比より有意に大きい。

妊娠月数別には、第12表に示すように、死産数は10ヵ月以上が極めて多く61%を占め、8ヵ月及び9ヵ月が少ない。性比は、9ヵ月では100未満で女の方がむしろ多いが、その他の月数では何れも男の方が多い。しかし、

第 11 表 妊娠月数別、性別自然死産数及び性比——母体偶発疾患

妊 娠 月 数	死 産 数				男/女			男/(女+不詳)		
	計	男	女	性 別 不 詳	%	男・女 の有意 差	出生性比 との有意 差	%	男・(女+ 不詳)の 有意差	出生性比 との有意 差
総 数	4,124	2,219	1,766	139	125.7	* *	* *	116.5	* *	* *
4 月	201	91	44	66	206.8	* *	* *	82.7	—	—
5 月	510	294	181	35	162.4	* *	* *	136.1	* *	* *
6 月	672	332	318	22	104.4	(-)	(-)	97.6	—	—
7 月	715	401	311	3	128.9	* *	* *	127.7	* *	*
8 月	674	369	300	5	123.0	* *	*	121.0	*	(-)
9 月	513	286	224	3	127.7	* *	*	126.0	* *	*
10月以上	826	441	381	4	115.7	*	(-)	114.5	*	(-)
不 詳	13	5	7	1	—	—	—	—	—	—

** 危険率1%で有意

* 危険率5%で有意

有意差の認められるのは8ヵ月及び10ヵ月以上だけである。死産性比は、9ヵ月及び7ヵ月では出生性比よりも小さく、その他の月数では何れも出生性比より大きい。有意差の認められるのは8ヵ月及び10ヵ月以上の2群のみである。又、性比の大きさと妊娠月数との間には一定の傾向が認められない。

性別不詳を女とみなせば、妊娠4ヵ月の死産では男の方が少ないが、その他の月数のもの(9ヵ月と除く)ではなお男の方が多く、8ヵ月及び10ヵ月以上では有意差が認められる。又この場合の性比が出生性比よりも有意に大きいのは、同様に8ヵ月及び10ヵ月以上だけである。

即ち、性器及び産道異常による自然死産では、総数については、性別不詳を女とみなしてもなお男の方が有意に多く、男の多い程度は出生におけるそれよりも有意に大きいと言ひ得る。しかし、妊娠月数別にみると、女の方が多い場合もあり、総数における結論と同様のことが言ひ得るのは妊娠8ヵ月及び10ヵ月以上だけである。性比の大きさと妊娠月数との関係には一定の傾向が見出されない。

2で最も大きい(4ヵ月を除く)が、しかし男女の差は有意でない。その他の月数においても何れも男女の有意差は認められない。出生性比よりも大きい性比を示すのは10ヵ月以上のみであり、有意差は認められず、その他の月数における性比は何れも出生性比より小さく、有意の差は認められない。

性別不詳を女とみなした場合にはなお男の方が多いのは、妊娠4ヵ月と10ヵ月以上の2群のみであり、有意差は何れにおいても認められない。

即ち、胎児奇形による自然死産では、総数については、男の方が女よりも若干多いが、性比は出生性比とほぼ等しく、性別不詳を女とみなせば男の方がむしろ少なくなり、男が女よりも多いとは言ひ難い。この性比は原因別自然死産のうちでは最も小さく、男の方が多いと言ひ得ない自然死産の原因は、この胎児奇形と前記の梅毒だけである。妊娠月数別にみれば、女の方が多い月数もあり、何れか一方が多いという一定の傾向がない。

8) 胎児異常(奇形を除く)による自然死産奇形を除く胎児異常による自然死産は総数8,763で、うち男4,6

第12表 妊娠月数別、性別自然死産数及び性比——性器及び産道異常

妊娠月数	死産数				男/女			男/(女+不詳)		
	計	男	女	性別不詳	%	男・女の有意差	出生性比との有意差	%	男・(女+不詳)の有意差	出生性比との有意差
総数	1,652	928	670	54	138.5	* *	* *	128.2	* *	* *
4月	88	32	22	34	145.5	(-)	(-)	57.1	—	—
5月	148	78	59	11	132.0	(-)	(-)	111.4	(-)	(-)
6月	136	75	36	5	133.9	(-)	(-)	123.0	(-)	(-)
7月	115	58	57	—	101.8	(-)	(-)	101.8	(-)	(-)
8月	76	50	26	—	192.3	* *	*	192.3	* *	*
9月	83	38	44	1	86.4	(-)	(-)	—	—	—
10月以上	1,005	596	406	3	146.8	* *	* *	145.7	* *	* *
不詳	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—

** 危険率1%で有意

* 危険率5%で有意

7) 胎児奇形による自然死産

胎児奇形による自然死産総数1,647のうち、男817、女772、性別不詳58であり、性比は105.8で、原因別の自然死産性比のうち最も小さい。男女死産数の差には有意性が認められない。又この性比は出生性比とほぼ同値であり、勿論有意差はない。性別不詳を女とみなせば、男の方がむしろ少なくなる。

妊娠月数別には、第13表に示すように、死産数は10ヵ月以上が最も多く50%を占め、月数の少ないほど例数が少ない。男女を比べると、4ヵ月では女と確認されたものは皆無であり、9ヵ月及び10ヵ月以上においては男の方が多く、6ヵ月では男女同数であり、その他の月数のものでは女の方がむしろ多い。10ヵ月以上の性比は111.

64、女3,790、性別不詳309であり、性比は123.1である。男女の差は有意であり、この性比は出生性比よりも有意に大きい。性別不詳を女とみなしてもなお男の方が有意に多く、且つこの場合の性比も出生性比より有意に大きい。

妊娠月数別には、第14表に示す如く、死産数は10ヵ月以上が約4割を占めて最も多く、妊娠月数の少ないほど死産数が少ない。男女を比べると、何れの月数においても男の方が多く、その差は何れも有意である。性比は4ヵ月が186.8で最も大きく、5ヵ月がこれに次ぎ、8ヵ月までは月数の多いほど小さいが、9ヵ月以上では若干大きくなる。これらの性比は何れも出生性比よりも大きく、7、8ヵ月の両者を除いて有意差が認められる。

第 13 表 妊娠月数別、性別自然死産数及び性比——胎児奇形

妊 娠 月 数	死 産 数				男/女			男/(女+不詳)		
	計	男	女	性 別 不 詳	%	男・女 の有意 差	出生性比 との有意 差	%	男・(女+ 不詳)の 有意差	出生性比 との有意 差
総 数	1,647	817	772	58	105.8	(-)	(-)	98.4	—	—
4 月	13	7	—	6	—	—	—	116.7	(-)	(-)
5 月	27	5	8	14	62.5	(-)	(-)	—	—	—
6 月	58	20	20	18	100.0	(-)	(-)	52.6	—	—
7 月	109	51	53	5	96.2	(-)	(-)	—	—	—
8 月	195	89	98	8	90.8	(-)	(-)	—	—	—
9 月	320	160	156	4	102.6	(-)	(-)	100.0	(-)	(-)
10月以上	924	485	436	3	111.2	(-)	(-)	110.5	(-)	(-)
不 詳	1	—	1	—	—	—	—	—	—	—

** 危険率1%で有意

* 危険率5%で有意

性別不詳を女とみなしても、不詳の数の多い4カ月を除いては、何れもなお男の方が多く、有意差の認められるのは9カ月及び10カ月以上のみである。又この場合の性比は、4カ月を除いて何れも出生性比より大きい、有意差の認められるのは上記同様に9カ月及び10カ月以上の2群だけである。

即ち、胎児異常による自然死産では、総数については、性別不詳を女とみなしてもなお男の方が有意に多く、男の多い程度は出生におけるそれよりも著明である。妊娠月数別にみれば、性別の判明したものだけでは、何れの月数の死産数も男の方が有意に多く、性比は出生性比に比べて概ね有意に大きい、性別不詳を女とみなす場合には、9カ月及び10カ月以上のものにおいてのみ男の方がなお有意に多く、かつこの場合の性比も出生性比より有意に大きい。又、性比は妊娠8カ月までは月数の多いほど大きいという傾向が認められる。

9) 附属物異常による自然死産

胎児附属物の異常による自然死産は総数8,448で、うち男4,679、女3,693、性別不詳76であり、性比は126.7である。男女の差は有意であり、この性比は出生性比よりも有意に大きい。性別不詳を女とみなしてもなお男の方が有意に多く、この場合の性比も出生性比より有意に大きい。

妊娠月数別には、第15表に示す如く、死産数は10カ月以上が約半数を占めて最も多く、妊娠月数の少ないほど例数が少なく、特に4カ月のものは全体の0.6%にすぎない。何れの妊娠月数の死産も男の方が有意に多い。性比は4カ月が最大で、5カ月がこれに次ぎ、9カ月が最小であり、その他の月数の間では著差がなく、妊娠月数と性比の大きさとの間には一定の傾向が認められない。これらの性比は、何れも出生性比よりも大きく、4カ月及び6カ月を除けば有意差が認められる。

第 14 表 妊娠月数別、性別自然死産数及び性比——胎児異常

妊 娠 月 数	死 産 数				男/女			男/(女+不詳)		
	計	男	女	性 別 不 詳	%	男・女 の有意 差	出生性比 との有意 差	%	男・(女+ 不詳)の 有意差	出生性比 との有意 差
総 数	8,763	4,664	3,790	309	123.1	**	**	113.8	**	**
4 月	211	71	38	102	186.8	**	**	50.7	—	—
5 月	591	308	186	97	165.6	**	**	108.8	(-)	(-)
6 月	681	356	285	40	124.9	**	*	109.5	(-)	(-)
7 月	1,022	535	467	20	114.6	*	(-)	109.9	(-)	(-)
8 月	1,353	712	629	12	113.2	*	(-)	111.1	(-)	(-)
9 月	1,482	807	664	11	121.5	**	**	119.6	**	*
10月以上	3,395	1,861	1,510	24	123.2	**	**	121.3	**	**
不 詳	28	14	11	3	—	—	—	—	—	—

** 危険率1%で有意

* 危険率5%で有意

性別不詳を女とみなした場合には、妊娠4ヵ月では男女同数となるが、その他の月数ではなお男の方が多く、6ヵ月以上の各群では有意差が認められる。この場合の性比も、4ヵ月を除けば出生性比より大きい、有意差の認められるのは7、8ヵ月及び10ヵ月以上の3群だけである。

即ち、附属物異常による自然死産では、総数については、性別不詳を女とみなしてもなお男の方が有意に多く、男の多い程度は出生におけるそれよりも著明である。妊娠月数別には、何れの月数のものも男の方が有意に多く、その性比は出生性比よりも概ね有意に大きい、性別不詳を女とみなす場合には、4ヵ月及び5ヵ月の死産では男が有意に多いとは言えない。又性比の大きさと妊娠月数との間には一定の傾向は認められない。

10) 胎位異常による自然死産

胎位異常による自然死産総数3,775のうち、男2,125、

女1,636、性別不詳14で、性比は129.9であり、性別不詳の数が極めて少ない。男女の差は有意であり、性比は出生性比より有意に大きい。性別不詳14を女とみなしても性比は殆んど変わらず、男の方がなお有意に多く、出生性比より有意に大きい。

妊娠月数別には、第16表に示すように、死産数は10ヵ月以上が78%を占め、9ヵ月が10%、8ヵ月が6%を占め、7ヵ月以前のは著しく少ない。妊娠4ヵ月の死産では女の方が多いが、例数は極めて少なく、5ヵ月以上ではすべて男の方が多い。しかし、男女の有意差が認められるのは、例数の関係もあつて、8、9ヵ月及び10ヵ月以上のみである。性比は、8ヵ月において最大であり、妊娠月数と性比の大きさとの間には明らかな関係を認め得ない。5ヵ月以上の各月数における性比は何れも出生性比より大きい、有意差のあるのは8、9ヵ月及び10ヵ月以上の3群だけである。

第 15 表 妊娠月数別、性別自然死産数及び性比——附属物異常

妊娠月数	死産数				男/女			男/(女+不詳)		
	計	男	女	性別不詳	%	男・女の有意差	出生性比との有意差	%	男・(女+不詳)の有意差	出生性比との有意差
総数	8,448	4,679	3,693	76	126.7	* *	* *	124.1	* *	* *
4月	52	26	12	14	216.7	*	(-)	100.0	(-)	(-)
5月	249	132	92	25	143.5	* *	*	112.8	(-)	(-)
6月	502	275	222	5	123.9	*	(-)	121.1	*	(-)
7月	811	450	356	5	126.4	* *	*	124.7	* *	*
8月	1,034	579	450	5	128.7	* *	* *	127.3	* *	* *
9月	1,205	652	546	7	119.4	* *	*	117.9	* *	(-)
10月以上	4,566	2,549	2,003	14	127.3	* *	* *	126.4	* *	* *
不詳	29	16	12	1	—	—	—	—	—	—

** 危険率1%で有意 * 危険率5%で有意

第 16 表 妊娠月数別、性別自然死産数及び性比——胎位異常

妊娠月数	死産数				男/女			男/(女+不詳)		
	計	男	女	性別不詳	%	男・女の有意差	出生性比との有意差	%	男・(女+不詳)の有意差	出生性比との有意差
総数	3,775	2,125	1,636	14	129.9	* *	* *	128.8	* *	* *
4月	9	2	3	4	66.1	(-)	(-)	—	—	—
5月	27	15	11	1	136.4	(-)	(-)	125.0	(-)	(-)
6月	70	37	32	1	115.6	(-)	(-)	112.1	(-)	(-)
7月	128	74	52	2	142.3	(-)	(-)	137.0	(-)	(-)
8月	211	132	78	1	169.2	* *	* *	167.1	* *	* *
9月	379	215	162	2	132.7	* *	*	131.1	* *	*
10月以上	2,943	1,643	1,297	3	126.7	* *	* *	126.4	* *	* *
不詳	8	7	1	—	—	—	—	—	—	—

** 危険率1%で有意 * 危険率5%で有意

性別不詳を女とみなした場合には、この原因による死産では性別不詳の数が少ない故、上記の性別判明したものだけについての状況とほぼ同様である。

即ち胎位異常による自然死産では、性別不詳を女とみなしても、総数では男の方が有意に多く、男の多い程度は出生におけるそれよりも更に著しい。妊娠月数別には、例数の少ない7カ月以前を除けば、総数における場合と同様のことが言い得る。

11) 微弱陣痛及びその他の陣痛異常による自然死産

この原因による自然死産総数は1,135で、うち男713, 女419, 性別不詳3で、性比は170.2である。原因別自然死産のうち、この原因によるものが最も大きい性比を示す。男女の差は勿論有意であり、出生性比との差も有意である。性別不詳の数は極めて少なく、これを女とみなしても性比は殆んど変わらず、男女の差も、出生性比との差も何れも有意である。

妊娠月数別には、第17表に示す如く、死産数は10カ月以上が91%、9カ月が5%を占めている。従つて8カ月以前の死産は少数であり、男女の比較を行なうのは困難である。9カ月では性比154.2であるが、例数が少ないため男女差には有意性が認められない。10カ月以上では性比175.0で総数における性比よりも大きく、男女の差は有意であり、出生性比との間にも有意差が認められる。性別不詳を女とみなしても、この結論には変りがない。

即ち、微弱陣痛及びその他の陣痛異常による自然死産は、殆んどすべて妊娠10カ月以上においてみられ、男は女よりも約7割多く、その差は勿論有意であり、男女の開きは他の何れの原因による死産よりも大きい。

12) 破水異常による自然死産

破水異常による自然死産は総数2,391であり、うち男1,315, 女1,045, 性別不詳31であり、性比は125.8で

ある。男女の差は有意であり、性比は出生性比よりも有意に大きい。性別不詳を女とみなしてもなお男の方が有意に多く、この場合の性比も出生性比よりも有意に大きい。

妊娠月数別には、第18表に示す如く、死産数は10カ月以上が最も多く36%を占め、4カ月は著しく少なく、その他の月数の間では差が小さい。何れの月数の死産においても、男の方が多いが、6, 8, 9カ月のものでは有意差は認められない。性比は4カ月が最大で、9カ月までは妊娠月数の多いほど概ね小さいという傾向がみられるが、10カ月以上のものは8カ月よりも大きい。これらの性比は何れも出生性比より大きい。有意差の認められるのは4カ月及び10カ月以上の2群のみである。

性別不詳を女とみなした場合にも、なお何れの妊娠月数でも男の方が多いが、しかし有意差の認められるのは7カ月及び10カ月以上のみである。この場合の性比も、何れの月数においても出生性比より大きい。有意差のあるのは10カ月以上だけである。

即ち、破水異常による自然死産では、総数については、性別不詳を女とみなしてもなお男の方が多く、男の多い程度は出生におけるそれよりも著明である。妊娠月数別には、何れの月数においても、性別不詳を女とみなしてもなお男の方が多いが、総数における結論と同じ結論の得られるのは妊娠10カ月以上の死産だけである。妊娠9カ月以前のものでは、妊娠月数の多いほど性比が小さいという傾向がある。

13) 外因による自然死産

労働、転倒、旅行等の外因による自然死産は総数5,336で、そのうち男2,923, 女2,180, 性別不詳233であり、性比は134.1である。男女の差は有意であり、性比は出生性比よりも有意に大きい。性別不詳を女とみなしてもなお男の方が有意に多く、この場合の性比も出生性比よ

第17表 妊娠月数別、性別自然死産数及び性比——微弱陣痛及びその他の陣痛異常

妊娠月数	死産数				男/女			男/(女+不詳)		
	計	男	女	性別不詳	%	男・女の有意差	出生性比との有意差	%	男・(女+不詳)の有意差	出生性比との有意差
総数	1,135	713	419	3	170.2	**	**	169.0	**	**
4月	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
5月	1	—	1	—	—	—	—	—	—	—
6月	8	5	3	—	166.7	(—)	(—)	166.7	(—)	(—)
7月	11	4	7	—	57.1	(—)	(—)	—	—	—
8月	16	9	7	—	128.6	(—)	(—)	128.6	(—)	(—)
9月	61	37	24	—	154.2	(—)	(—)	154.2	(—)	(—)
10月以上	1,037	658	376	3	175.0	**	**	173.6	**	**
不詳	1	—	1	—	—	—	—	—	—	—

** 危険率1%で有意

* 危険率5%で有意

第 18 表 妊娠月数別、性別自然死産数及び性比——破水異常

妊 娠 月 数	死 産 数				男/女			男/(女+不詳)		
	計	男	女	性 別 不 詳	%	男・女 の有意 差	出生性比 との有意 差	%	男・(女+ 不詳)の 有意差	出生性比 との有意 差
総 数	2,391	1,315	1,045	31	125.8	**	**	122.2	**	**
4 月	34	21	8	5	262.5	*	*	161.5	(-)	(-)
5 月	223	119	87	17	136.8	**	(-)	114.4	(-)	(-)
6 月	334	184	149	1	123.5	(-)	(-)	122.7	(-)	(-)
7 月	368	206	160	2	128.8	*	(-)	127.2	*	(-)
8 月	327	177	148	2	119.6	(-)	(-)	118.0	(-)	(-)
9 月	235	127	107	1	118.7	(-)	(-)	117.6	(-)	(-)
10月以上	865	478	384	3	124.5	**	*	123.5	**	*
不 詳	5	3	2	-	-	-	-	-	-	-

** 危険率1%で有意

* 危険率5%で有意

り有意に大きい。

妊娠月数別には第19表に示す如く、死産数は7カ月が最も多く、4カ月が最も少ないが、月数による死産数の差は余り大きくない。男女を比べると、何れの月数のものも男の方が多く、且つ有意差が認められる。性比は4カ月が最大で、10カ月以上が最小であり、6、9カ月の例外を除くと、妊娠月数の多いほど性比は概ね小さくなるという傾向がある。これらの性比は何れも出生性比より大きく、4、5、7、9カ月では有意差が認められる。

性別不詳を女とみなした場合でも、何れの妊娠月数でもなお男の方が多く、4、6カ月を除いては有意差が認められる。この場合の性比も何れも出生性比より大きく、5カ月及び7カ月では有意の差が認められる。

即ち、外因による自然死産では、総数については、性別不詳を女とみなしてもなお男の方が有意に多く、男の多い程度は出生における男の多い程度よりも著明であ

る。妊娠月数別には、性比は概ね月数の少ないほど大きいという傾向があり、何れも男の方が有意に多く、性別不詳を女とみなしても概ね同様である。しかし、性比と出生性比との差は何れの妊娠月数のものも有意であるとは言えない。

14) 諸種流産

諸種流産とは習慣性流産・早産、又は単に流産、不全流産等と記載された自然死産である。この死産総数は400で、うち男221、女144、性別不詳35であり、性比は153.5で、原因別自然死産性比のうち、「微弱陣痛及びその他の陣痛異常」に次いで大きい。男女の差は有意であり、この性比は出生性比よりも有意に大きい。性別不詳を女とみなしても、なお男の方が有意に多く、この場合の性比も出生性比よりも大きいしかし有意差は認められない。

妊娠月数別には、第20表に示すように、死産数は5

第 19 表 妊娠月数別、性別自然死産数及び性比——外因

妊 娠 月 数	死 産 数				男/女			男/(女+不詳)		
	計	男	女	性 別 不 詳	%	男・女 の有意 差	出生性比 との有意 差	%	男・(女+ 不詳)の 有意差	出生性比 との有意 差
総 数	5,336	2,923	2,180	233	134.1	**	**	121.1	**	**
4 月	322	166	54	102	307.4	**	**	106.4	(-)	(-)
5 月	853	496	281	76	176.5	**	**	138.9	**	**
6 月	943	501	419	23	119.6	**	(-)	113.3	(-)	(-)
7 月	969	534	420	15	127.1	**	**	122.8	**	*
8 月	798	435	358	5	121.5	**	(-)	119.8	*	(-)
9 月	642	354	286	2	123.7	**	*	122.9	*	(-)
10月以上	794	430	354	10	121.5	**	(-)	118.1	*	(-)
不 詳	15	7	8	-	-	-	-	-	-	-

** 危険率1%で有意

* 危険率5%で有意

カ月が最も多く、10カ月以上が最も少なく、4カ月を除いては妊娠月数の多いほど例数が多い。男女を比べると、何れの月数でも男の方が多いが、例数が少ないことにもより、有意差の認められるのは妊娠4カ月及び5カ月だけである。性比は4カ月が最大で、7カ月が最小であり、妊娠月数と性比の大きさとの間には一定の傾向がみられない。これらの性比は何れも出生性比より大きい。有意差の認められるのは妊娠4カ月だけである。

性別不詳を女とみなせば、妊娠4カ月を除いては、何れの月数でも男の方が多く、且つ性比は出生性比より大きい。有意差が認められるのは全くない。

即ち、諸種流産では、総数については、男が女よりも有意に多く、その性比は出生性比より有意に大きい。しかし、性別不詳を女とみなせば、男の方がなお有意に多いが、この場合の性比は出生性比との間に有意差は認められない。妊娠月数別にみれば、何れも男の方が多く、性比は出生性比よりも大きい。有意差は殆んど認められない。又性比の大きさと妊娠月数との間には一定の傾向がみられない。

方が多く、8カ月及び9カ月を除けば有意差が認められる。性比は、4カ月において最大で、10カ月以上がこれに次ぎ、9カ月において最小であり、10カ月以上が大きいを除けば、妊娠月数の多いほど性比が小さいという傾向が認められる。又、これらの性比は何れも出生性比よりも大きい。しかし有意差の認められるのは4、5カ月及び10カ月以上の死産だけである。

性別不詳を女とみなす場合には、妊娠4カ月及び5カ月においては男の方が少なく、6カ月以上の各月数ではなお男の方が多い。しかし、有意差の認められるのは10カ月以上だけであり、その他の月数ではその差が僅少である。この場合の性比(男/(女+不詳)×100)が出生性比よりも有意に大きいのは10カ月以上の死産だけである。

妊娠回数別の性別死産数及び性比は第22表に示す如くで、何れの回数においても男の方が多く、5回目を除いては男女差が有意である。性比は4回目が最大、5回目が最小を示し、妊娠回数と死産性比との間には一定の関係が認められない。又、これらの性比は何れも出生性比

第20表 妊娠月数別、性別自然死産数及び性比——諸種流産

妊娠月数	死産数				男/女			男/(女+不詳)		
	計	男	女	性別不詳	%	男・女の有意差	出生性比との有意差	%	男・(女+不詳)の有意差	出生性比との有意差
総数	400	221	144	35	153.5	**	**	123.5	*	(-)
4月	39	16	3	20	533.3	**	**	69.6	—	—
5月	96	53	34	9	155.9	*	(-)	123.3	(-)	(-)
6月	78	46	30	2	153.3	(-)	(-)	143.8	(-)	(-)
7月	78	42	35	1	120.0	(-)	(-)	116.7	(-)	(-)
8月	54	32	22	-	145.5	(-)	(-)	145.5	(-)	(-)
9月	31	17	12	2	141.7	(-)	(-)	121.4	(-)	(-)
10月以上	22	13	8	1	162.5	(-)	(-)	144.4	(-)	(-)
不詳	2	2	-	-	—	—	—	—	—	—

** 危険率1%で有意

* 危険率5%で有意

2. 人工死産の原因別性比

1) 人工死産総数

人工死産は総数12,550で、そのうち男6,175,女5,045性別不詳1,330である。人工死産は妊娠初期に比較的多い故、性別不詳の数が多く、約10%を占めている。性比は122.4で、自然死産より若干小さい。男女の差は有意であり、この性比は出生性比105.6よりも有意に大きい。しかし、性別不詳を女とみなせば男の方が少ない。従つて、性別不詳の数の真の内容如何によつては、男が多いという結論は必ずしも得られない。

妊娠月数別の性別死産数及び性比は第21表に示すようであり、男女を比べると、何れの月数においても男の

より大きく、5回目を除いてはすべて有意差がある。

性別不詳を女とみなせば、男の方がなお多いのは第1回の妊娠だけであり、この差は有意である。その他の回数のもものでは男の方が少なくなる。

即ち、妊娠月数別にみても、妊娠回数別にみても、男が女より概ね有意に多いが、性別不詳の数を考慮に入れ、これをすべて女とみなす場合には、男が多いとは殆んど言えない。

2) 妊娠中毒症による人工死産

妊娠中毒症による人工死産は総数2,847で、うち男1,382,女1,233,性別不詳232であり、性比は112.1で、原因別人工死産のうち性比が最も小さい。しかし、

第 21 表 妊娠月数別，性別人工死産数及び性化——合計

妊娠月数	死産数				男/女			男/(女+不詳)		
	計	男	女	性別不詳	%	男・女の有意差	出生性比との有意差	%	男・(女+不詳)の有意差	出生性比との有意差
総数	12,550	6,175	5,045	1,330	122.4	* *	* *	96.9	—	—
4 月	1,518	469	319	730	147.0	* *	* *	44.7	—	—
5 月	3,011	1,470	1,102	439	133.4	* *	* *	95.4	—	—
6 月	3,002	1,539	1,368	95	112.5	* *	(-)	105.2	(-)	(-)
7 月	1,831	953	849	29	112.2	*	(-)	108.5	(-)	(-)
8 月	1,147	600	538	9	111.5	(-)	(-)	109.7	(-)	(-)
9 月	626	321	301	4	106.6	(-)	(-)	105.2	(-)	(-)
10月以上	1,385	808	560	17	144.3	* *	* *	140.0	* *	* *
不詳	30	15	8	7	—	—	—	—	—	—

** 危険率1%で有意

* 危険率5%で有意

第 22 表 妊娠回数別，性別人工死産数及び性比——合計

妊娠回数	死産数				男/女			男/(女+不詳)		
	計	男	女	性別不詳	%	男・女の有意差	出生性比との有意差	%	男・(女+不詳)の有意差	出生性比との有意差
総数	12,550	6,175	5,045	1,330	122.4	* *	* *	96.9	—	—
1 回目	4,222	2,192	1,729	301	126.8	* *	* *	108.0	*	(-)
2 "	1,688	810	690	188	117.4	* *	*	92.3	—	—
3 "	1,348	661	518	169	127.6	* *	* *	96.2	—	—
4 "	1,225	592	457	176	129.5	* *	* *	93.5	—	—
5 "	1,102	504	454	144	111.0	(-)	(-)	84.3	—	—
6 "以上	2,924	1,398	1,177	348	118.8	* *	* *	91.7	—	—
不詳	42	18	20	4	—	—	—	—	—	—

** 危険率1%で有意

* 危険率5%で有意

第 23 表 妊娠月数別，性別人工死産数及び性比——妊娠中毒症

妊娠月数	死産数				男/女			男/(女+不詳)		
	計	男	女	性別不詳	%	男・女の有意差	出生性比との有意差	%	男・(女+不詳)の有意差	出生性比との有意差
総数	2,847	1,382	1,233	232	112.1	* *	(-)	94.3	—	—
4 月	296	80	74	142	108.1	(-)	(-)	37.0	—	—
5 月	560	280	209	71	134.0	* *	* *	100.0	(-)	(-)
6 月	630	334	284	12	117.6	*	(-)	112.8	(-)	(-)
7 月	467	222	241	4	92.1	(-)	(-)	—	—	—
8 月	372	194	177	1	109.6	(-)	(-)	109.0	(-)	(-)
9 月	235	122	113	—	108.0	(-)	(-)	108.0	(-)	(-)
10月以上	280	148	131	1	113.0	(-)	(-)	112.1	(-)	(-)
不詳	7	2	4	1	—	—	—	—	—	—

** 危険率1%で有意

* 危険率5%で有意

男女の差は有意である。又この性比は出生性比よりも大きい、有意差は認められない。性別不詳を女とみなせば、男の方がむしろ少なくなる。

妊娠月数別には、第23表に示すように、死産数は6カ月が最も多く、9カ月が最も少い。男女を比べると、7カ月を除いては、男の方が多いが、有意差の認められるのは5カ月及び6カ月だけである。又7カ月を除く性比は出生性比より何れも大きい、その差の有意性が認められるのは5カ月だけである。性比は5カ月のものが最大であり、妊娠月数と性比の大きさとの間には一定の傾向が認められない。

性別不詳を女とみなしてもなお男の方が多いのは、6, 8, 9カ月及び10カ月以上の4群のみで、しかもその差は何れも有意でない。

3) 精神病による人工死産

精神病による人工死産は総数64で、うち男31, 女24, 性別不詳9であり、性比は129.2である。男女の差には有意性が認められず、この性比は出生性比より大きい、有意差がない。性別不詳を女とみなせば、男の方が少なくなる。

即ち、この原因による人工死産では、男女の差は認められない。妊娠月数別の観察は、例数が少ない故省略する。

4) 結核による人工死産

結核による人工死産総数3,603のうち、男1,668, 女1,363, 性別不詳572であり、性比は122.4である。男は女よりも有意に多く、性比は出生性比よりも有意に大きい。しかし、性別不詳を女とみなした場合は、男の方がむしろ少ない。

妊娠月数別には、第24表に示すように、死産数は5カ月及び6カ月が著しく多く、両者で全体の62%を占め、9カ月以上は極めて少ない。男女を比較すると、9

カ月を除けば何れも男の方が多く、男女の差は4, 5, 7カ月において有意である。性比は10カ月以上が最大で、4カ月がこれに次ぎ、妊娠月数と性比の大きさとの間には一定の関係はみられない。これらの性比は、9カ月及び8カ月を除くと、出生性比よりも大きく、4, 5, 7カ月において有意差が認められる。

性別不詳を女とみなした場合にもなお男の方が多いのは、6, 7, 8カ月の3群のみであり、有意差は何れにも認められない。この場合の性比は、6, 7カ月においては出生性比より大きい、有意ではない。

5) 母体偶発疾患による人工死産

結核及び精神病を除く母体の妊産非特有疾患による人工死産は総数2,611であり、うち男1,230, 女1,076, 性別不詳305である。性比は114.3で、原因別人工死産性比のうち、妊娠中毒症に次いで小さい。しかし、男女の差は有意である。この性比は出生性比よりも大きい、有意差は認められない。性別不詳を女とみなせば、男の方がむしろ少ない。従つて、本疾患による人工死産は男の方が多いということは、厳密には言い得ない。

妊娠月数別には、第25表に示す如く、死産数は6カ月及び5カ月のものが最も多く、両者で全体の約6割を占め、7カ月以後では妊娠月数の多いほど例数が少く、10カ月以上が最も少ない。男女を比べれば、8カ月を除いては男の方が多いが、有意差の認められるのは4カ月及び5カ月のみである。性比は4カ月が最大で、10カ月以上がこれに次ぎ、8カ月までは妊娠月数の多いほど概ね性比が小さいという傾向がある。これらの性比のうち、4, 5, 7カ月及び10カ月以上においては出生性比より大きい、有意差の認められるのはこのうち前2者だけである。

性別不詳を女とみなした場合にもなお男の方が多いのは、妊娠7, 9カ月及び10カ月以上の3群のみであり、

第24表 妊娠月数別、性別人工死産数及び性比——結核

妊娠月数	死産数				男/女			男/(女+不詳)		
	計	男	女	性別不詳	%	男・女の有意差	出生性比との有意差	%	男・(女+不詳)の有意差	出生性比との有意差
総数	3,603	1,668	1,363	572	122.4	* *	* *	86.2	—	—
4月	658	190	135	333	140.7	* *	* *	40.6	—	—
5月	1,209	579	441	189	131.3	* *	* *	91.9	—	—
6月	1,035	532	472	31	112.7	(-)	(-)	105.8	(-)	(-)
7月	482	262	213	7	123.0	*	*	119.1	(-)	(-)
8月	153	78	74	1	105.4	(-)	(-)	104.0	(-)	(-)
9月	23	7	15	1	46.7	(-)	(-)	—	—	—
10月以上	30	15	9	6	166.7	(-)	(-)	100.0	(-)	(-)
不詳	13	5	4	4	—	—	—	—	—	—

** 危険率1%で有意

* 危険率5%で有意

第 25 表 妊娠月数別、性別人工死産数及び性比——母体偶発疾患

妊娠月数	死産数				男/女			男/(女+不詳)		
	計	男	女	性別不詳	%	男・女の有意差	出生性比との有意差	%	男・(女+不詳)の有意差	出生性比との有意差
総数	2,611	1,230	1,076	305	114.3	* *	(-)	95.6	—	—
4 月	361	123	66	172	186.4	* *	* *	51.7	—	—
5 月	773	372	297	104	125.3	* *	*	92.8	—	—
6 月	776	385	373	18	103.2	(-)	(-)	98.5	—	—
7 月	385	197	185	3	106.5	(-)	(-)	104.8	(-)	(-)
8 月	201	90	109	2	82.6	(-)	(-)	—	—	—
9 月	57	29	28	—	103.6	(-)	(-)	103.6	(-)	(-)
10月以上	52	28	18	6	155.6	(-)	(-)	116.7	(-)	(-)
不詳	6	6	—	—	—	—	—	—	—	—

** 危険率1%で有意

* 危険率5%で有意

これらにおいてもその差は僅少で、有意性が認められない。

6) 性器及び産道異常による人工死産

この原因による人工死産は総数は463で、うち男262, 女174, 性別不詳27である。この原因による人工死産は妊娠末期に多い故、性別不詳の数が少ない。性比は150.6で、原因別人工死産性比のうちでは附属物異常に次いで大きい。男女の差は有意であり、この性比は出生性比よりも有意に大きい。性別不詳を女とみなしてもなお男の方が有意に多く、この場合の性比も出生性比より有意に大きい。

妊娠月数別には、第26表に示すように、死産数は10ヵ月以上が45%占めて最も多く、9ヵ月以前のは月数による死産数の差が大きくない。男女を比べると、6ヵ月を除けば何れも男の方が多く、5, 8ヵ月及び10ヵ月以上では有意差が認められる。性比は8ヵ月が最大で、

5ヵ月、7ヵ月がこれに次ぎ、妊娠月数と性比の大きさとの間には一定の傾向がない。又これらの性比は6ヵ月を除いては出生性比よりも大きく、5, 8ヵ月及び10ヵ月以上では有意差が認められる。

性別不詳を女とみなす場合には、4, 6ヵ月を除いては、なお男の方が多いが、その差の有意であるのは8ヵ月及び10ヵ月以上だけである。又、この場合の性比が出生性比より有意に大きいのは10ヵ月以上の死産だけである。

即ち、性器及び産道異常による人工死産では、総数については、性別不詳を女とみなしてもなお男の方が有意に多く、男の多い程度が出生における男の多い程度よりも著明である。妊娠月数別にも、概ね男の方が多いが、総数についてと同じことが言えるのは妊娠10ヵ月以上の死産だけである。

7) 胎児異常(胎児奇形を含む)による人工死産

第 26 表 妊娠月数別、性別人工死産数及び性比——性器及び産道異常

妊娠月数	死産数				男/女			男/(女+不詳)		
	計	男	女	性別不詳	%	男・女の有意差	出生性比との有意差	%	男・(女+不詳)の有意差	出生性比との有意差
総数	463	262	174	27	150.6	* *	* *	130.3	* *	*
4 月	44	16	11	17	145.5	(-)	(-)	57.1	—	—
5 月	45	28	13	4	215.4	*	*	164.7	(-)	(-)
6 月	58	25	29	4	86.2	(-)	(-)	—	—	—
7 月	41	25	16	—	156.3	(-)	(-)	156.3	(-)	(-)
8 月	27	19	7	1	271.4	*	*	237.5	*	(-)
9 月	41	24	17	—	141.2	(-)	(-)	141.2	(-)	(-)
10月以上	207	125	81	1	154.3	* *	* *	152.4	* *	* *
不詳	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

** 危険率1%で有意

* 危険率5%で有意

胎児奇形を含む胎児異常による人工死産総数は595で、うち男287、女238、性別不詳で70あり、性比は120.6である。男女の差は有意である。この性比は出生性比より大きいがしかしその差は有意でない。性別不詳を女とみなせば、男の方がむしろ少なくなる。従つて、この死産は男の方が多いという結論は、厳密には言い得ない。

妊娠月数別には、第27表の如く、死産数は5、6カ月のものが最も多い。妊娠9カ月だけは女の方が多いが、その他の月数ではすべて男の方が多い。しかし、男女差の有意であるのは5カ月だけである。性比は、4カ月のものが最大で、5カ月、7カ月がこれに次ぎ、妊娠月数と性比の大きさとの間には一定の傾向が認められない。又これらの性比のうち、9カ月及び6カ月を除くと、出生性比よりも大きいが、何れも有意でない。

性別不詳を女とみなしてもなお男の方が多いのは妊娠7、8カ月及び10カ月以上の3群であるが、何れも有意差は認められない。

第27表 妊娠月数別、性別人工死産数及び性比——胎児異常

妊 娠 月 数	死 産 数				男/女			男/(女+不詳)		
	計	男	女	性 別 不 詳	%	男・女 の有意 差	出生性比 との有意 差	%	男・(女+ 不詳)の 有意差	出生性比 との有意 差
総 数	595	287	238	70	120.6	*	(-)	93.2	—	—
4 月	46	15	9	22	166.7	(-)	(-)	48.4	—	—
5 月	113	54	35	24	154.3	*	(-)	91.5	—	—
6 月	104	47	46	11	102.2	(-)	(-)	82.5	—	—
7 月	94	50	34	10	147.1	(-)	(-)	113.6	(-)	(-)
8 月	84	44	38	2	115.8	(-)	(-)	110.0	(-)	(-)
9 月	54	25	29	—	86.2	(-)	(-)	—	—	—
10月以上	100	52	47	1	110.6	(-)	(-)	108.3	(-)	(-)
不 詳	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

* 危険率5%で有意

8) 付属物異常による人工死産

胎盤、臍帯及び羊水の異常による人工死産は、総数818のうち男503、女308、性別不詳7である。性比は163.3であり、原因別人工死産性比のうち最も大きい。男女の差は勿論有意であり、この性比は出生性比よりも有意に大きい。性別不詳を女とみなしてもなお男の方が有意に多く、この場合の性比も出生性比より有意に大きい。

妊娠月数別には、第28表の如く、死産数は10カ月以上が最も多く、4、5カ月のものは極めて少ない。男女を比べれば、4カ月では男女同数であるが、その他の同数では何れも男の方が多く、5、7、8カ月及び10カ月以上においては有意である。性比は8カ月が最大で、10

カ月以上、7カ月がこれに次ぎ、妊娠月数と性比の大きさの間には一定の傾向がない。これらの性比は、4カ月を除いては出生性比より大きく、7、8カ月及び10カ月以上で有意差が認められる。

即ち、付属物異常による人工死産では、総数については、性別不詳を女とみなしてもなお男の方が有意に多く、男の多い程度は出生において男の多い程度よりも著明である。妊娠月数別には、7、8カ月及び10カ月以上の3群において、総数と同様の結論が得られる。又妊娠月数と性比の大きさの間には一定の傾向は認められない。

9) 胎位異常による人工死産

胎位異常による人工死産総数240のうち、男131、女104、性別不詳5で、性比は126.0である。男の方が多いが有意差は認められず、従つてこの性比と出生性比との差も有意でない。性別不詳を女とみなしても男の方が多いが、勿論有意差がない。

妊娠月数別には、第29表の如く、死産数は10カ月に

上が66%を占めて最も多く、4、5カ月のものは極めて少ない。妊娠9カ月前では例数少なく、男女の比較は充分にできない。10カ月以上では性比135.8であるが、男女の差は有意でない。

総 括

昭和23年1月より6月に至る間の全国における死産69,739例について、自然死産、人工死産にわけて、原因別に性比を求め、これを検討した。解析方法としては、先ず男女死産数の差の有意性を検定し、次いで死産性比と出生性比(昭和22~25年全国合計の出生)との有意差の有無を確かめた。男の方が多い場合については更に、性別不詳を女とみなしてもなお男の方が有意に多いか、この場合の性比と出生性比との間に有意の差があるかど

第 28 表 妊娠月数別, 性別人工死産数及び性比——附属物異常

妊娠月数	死産数				男/女			男/(女+不詳)		
	計	男	女	性別不詳	%	男・女の有意差	出生性比との有意差	%	男・(女+不詳)の有意差	出生性比との有意差
総数	818	503	308	7	163.3	* *	* *	159.7	* *	* *
4 月	6	3	3	—	100.0	(—)	(—)	100.0	(—)	(—)
5 月	60	36	20	4	180.0	*	(—)	150.0	(—)	(—)
6 月	129	68	59	2	115.3	(—)	(—)	111.5	(—)	(—)
7 月	162	105	57	—	184.2	* *	* *	184.2	* *	* *
8 月	165	110	55	—	200.0	* *	* *	200.0	* *	* *
9 月	100	53	47	—	112.8	(—)	(—)	112.8	(—)	(—)
10月以上	195	127	67	1	189.6	* *	* *	186.8	* *	* *
不詳	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—

** 危険率 1% で有意 * 危険率 5% で有意

第 29 表 妊娠月数別, 性別人工死産数及び性比——胎位異常

妊娠月数	死産数				男/女			男/(女+不詳)		
	計	男	女	性別不詳	%	男・女の有意差	出生性比との有意差	%	男・(女+不詳)の有意差	出生性比との有意差
総数	240	131	104	5	126.0	(—)	(—)	120.2	(—)	(—)
4 月	4	4	—	—	—	—	—	—	—	—
5 月	2	2	—	—	—	—	—	—	—	—
6 月	10	3	6	1	50.0	(—)	(—)	—	—	—
7 月	15	7	7	1	100.0	(—)	(—)	87.5	—	—
8 月	19	9	10	—	90.0	(—)	(—)	—	—	—
9 月	32	15	14	3	107.1	(—)	(—)	88.2	—	—
10月以上	158	91	67	—	135.8	(—)	(—)	135.8	(—)	(—)
不詳	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

うかを検定した。主なる結果は次のようである。

1. 自然死産の性比

1) 自然死産総数 57,189 例では, 性比が 124.4 で, 男の方が有意に多く, この性比は出生性比 (105.6) より有意に大きい。性別不詳を女とみなしても同様のことが言える。

2) 原因別自然死産性比の大きい順に挙げれば次のようで, 何れの原因においても 100 以上を示し, 且つ出生性比より大きい。

微弱陣痛及びその他の陣痛異常 170.2, 諸種流産 153.5, 性器及び産道異常 138.5, 外因 134.1, 胎位異常 129.9, 附属物異常 126.7, 破水異常 125.8, 母体偶発疾患 125.7, 胎児異常 123.1, 結核 122.4, 妊娠中毒症 112.5, 梅毒 110.6, 胎児奇形 105.8

3) 「微弱陣痛及びその他の陣痛異常」, 「性器及び産道異常」, 「外因」, 「胎位異常」, 「附属物異常」, 「破水異常」, 「母体偶発疾患」, 「胎児異常」では, 性別不詳を女

とみなしてもなお男の方が有意に多く, これらの性比は出生性比よりも有意に大きい。

4) 「諸種流産」, 「妊娠中毒症」では, 男が女より有意に多く, 性比は出生性比より有意に大きい。性別不詳を女とみなしてもなお男の方が有意に多く, この場合の性比も出生性比より大きいが有意差はない。

5) 「結核」では, 男が女より有意に多く, 性比は出生性比より有意に大きい。性別不詳を女とみなしてもなお男の方が多いが男女差は有意でなく, この場合の性比は出生性比よりむしろ若干小さい。

6) 「梅毒」, 「胎児奇形」では, 男女死産数の間には有意差が認められず, 性比と出生性比との差も有意でない。

7) 妊娠月数別にみれば, 全原因合計では何れの月数でも男の方が有意に多く, 性比は出生性比より有意に大きく, 性別不詳を女とみなしても, 妊娠 4 カ月を除けば同様の結論が得られる。原因別には, 「母体偶発疾患」,

「胎児異常」, 「附屬物異常」, 「外因」では, 殆んどすべての妊娠月数において男の方が有意に多く, 性比が出生性比よりも有意に大きい, その他の原因では一部の妊娠月数のものだけ上記の結果が得られる。若干の原因では一部の妊娠月数のものにおいて性比が100未満を示す場合もあるが, しかし女の方が有意に多いと言ひ得る場合は全くない。

8) 性比の大きさと妊娠月数との関係については, 全原因合計では妊娠8ヵ月までは月数の多いほど性比が概ね小さいという傾向がみられる。原因別には, 「外因」では妊娠月数の多い程性比が概ね小さく, 「結核」, 「破水異常」では9ヵ月まで, 「胎児異常」では8ヵ月まで, 「妊娠中毒症」, 「梅毒」では7ヵ月までは, 妊娠月数の多いほど性比が小さいという傾向がみられるが, その他の原因では両者の間に一定の傾向は認められない。

2. 人工死産の性比

1) 人工死産総数12,550例では, 性比が122.4で, 男の方が有意に多く, この性比は出生性比より有意に大きい。しかし, 性別不詳の数が多く, これを女とみなせば男の方が少なくなる。従つて, 性別不詳の内容如何によつては, 男の方が多いという結論は必ずしも得られない。

2) 原因別人工死産性比の大きい順に挙げれば次のようであるが, 何れの原因においても100以上を示し, 且つ出生性比よりも大きい。

附屬物異常 163.3, 性器及び産道異常 150.6, 精神病 129.2, 胎位異常 126.0, 結核 122.4, 胎児異常 (奇形を含む) 120.6, 母体偶発疾患 114.3, 妊娠中毒症 112.1

3) 「附屬物異常」, 「性器及び産道異常」では, 性別不詳を女とみなしてもなお男の方が有意に多く, この場合の性比は出生性比より有意に大きい。

4) 「結核」では, 男が女より有意に多く, 性比は出生性比より有意に大きい, 性別不詳を女とみなせば男の方が少ない。

5) 「胎児異常」, 「母体偶発疾患」, 「妊娠中毒症」では,

男が女より有意に多く, 性比は出生性比より大きいが有意差は認められない。

6) 「精神病」, 「胎位異常」では, 男女の間に有意の差は認められず, 性比と出生性比との差も有意でない。

7) 妊娠月数別にみれば, 全原因合計ではすべての月数のものが男の方が多く, 8, 9ヵ月を除けば有意である。原因別には, すべての妊娠月数において男の方が多いのは「附屬物異常」だけであり, その他の原因では若干の妊娠月数のものでは女の方が多い。しかし, 男女の有意差の認められるのは, 男の方が多い場合に限られ, 女の方が有意に多い場合は全くない。

8) 性比の大きさと妊娠月数との関係については, 全原因合計と「母体偶発疾患」においては, 妊娠月数の多いほど概ね性比が小さいという傾向があるが, その他の原因では両者の間に一定の傾向が認められない。

稿を終るに臨み, 本研究に御指導, 御校閲を賜つた瀨木三雄教授, 並びに資料の供与等に多大の御援助を与えられた曾田長宗博士に深甚なる謝意を表するとともに, 解析に当り助力を与えられた東北大学公衆衛生学教室栗原登博士に感謝します。

文 献

- 1) 瀨木三雄・勝野六郎: 医事論 (1525, 6) (昭 16)
- 2) 堀内一彌・植木恒道・杉山 博: 北海道公衆衛生学雑誌 第7回 日本公衆衛生学会特輯号 68 (昭 27)
- 3) 高橋英次: 衛生統計 6 (8) 23 (昭 28)
- 4) 川原 弘・井之川孝雄: 日医大誌 21 235 (昭 29)
- 5) 和田達雄: 日本公衆衛生雑誌 4 (II) (増刊号) 61 (昭 32)
- 6) 野家美夫・鷗井光夫: 厚生の指標 1 (14) 2 (昭 29)